



I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部

第 11 号

Oct. 22, 2004

F D 研修会に思う

国語教育講座 宮澤正明

F D 研修会が 10 月 13 日に開催されました。今回は、学校教育講座の榊原禎宏先生と高橋英児先生による研究報告が行われました。教育学を専門にされているお二人だけに、F D に直結する内容になることが予想され、大きな期待をもって臨みました。

お二人は同じ科目の授業を 1 コマずつ担当されているのですが、それぞれの講義内容、授業形態、授業方法などの比較を通して、大学における授業の在り方、受講者への影響などを検証されました。

同一科目を担当しながらも、それぞれ独自の目標を掲げ、授業内容や方法を工夫されている点において、また、事前の準備段階では、見解の相違によって意見を闘わせたこともあったと告白されるなど、お二人が授業に真摯に取り組んでいる様子が伝わってきました。さらには、それぞれが異なる視点で授業を仕組んでいることによって生じる偏向性を予想し、ある時点でそれぞれの受講者を交え T T による授業を実践するなど、授業者による偏向の矯正的授業まで試みられており、その用意周到な計画性には驚かされました。受講生への思いやりや授業を大事にする心意気を感じさせていただきました。

詳細な研究報告の内容や参加者の感想については次ページ以降の特集記事に譲りますが、今回の研修会を通して次の点を感じました。

授業改善や開発 (F D) は、授業者の授業に臨む姿勢にかかっています。しかし、個別的にそれを開発することには限界があると思われます。受講者による授業評価に加えて、教員相互による授業観の意見交換、授業参観による実践の評価などを通して軌道修正したり客観性を高めたりすることが重要と思われます。今回のお二人の報告から強くそのことを感じました。

また、研修での討議では、大学院生の教員志望への温度差や内地留学生の基礎・基本を徹底することの重要性などの意見から、本学の掲げる理念、目標を積極的に示し、どのような学生を育もうとするのか育みたいのかといった方向性を明確にすることもわれわれの授業に臨む姿勢と大きく関わるように感じました。

社会の大学への要請、梨大生の授業への要請の声は日増しに大きくなっているように感じられます。F D 検討WGの今後の企画、行事に多くの方に参加してほしいと思います。



第2回学部FD研修会報告

6月の第1回に続いて、10月13日に第2回学部FD研修会が行われた。学校教育課程の榊原禎宏氏と高橋英児氏のお二人に「同一名称授業の内容・方法の共通性・多様性と教員養成への責任」と題して、話題を提供していただいた（当日の資料は本号3～6ページに掲載）。参加者は、教員12名（FDワーキング委員6名を含む）、事務職員2名、学生8名の、計30名であった。

議論に参加していただいた池田実さん、鳥海順子さんの感想と、研修会後のアンケートに寄せられた意見（無記名）のいくつかを紹介する。（I）

思考力と忍耐力と

社会科教育講座 池田 実

「各授業を通じて実質上認定される教職資格の正当性を担保するため（＝説明責任）、教育活動はどのように行われるべきなのか？」……報告者のこの問いかけには、教員養成系大学・学部の抱える課題と苦悩が凝縮されている。

対外的な説明責任を果たすには、卒業生の何割が教職に就いたかを具体的な数値で示すしか方法がない。教育実習やチューターで研鑽を積んだ学生にとっても、その経験を生かすには教採に合格することが絶対不可欠の条件となる。これは制度の問題であって、我々大学人が自ら改革できる立場にない以上、その害悪をあげつらい理不尽を嘆いても仕方のないことだ。制度の枠内で何ができるかを考えるしかない。

教師には「考える能力」や「批判的なものの見方ができる能力」が必要であり、そのような能力を育てるには、「学問の自由」「教授の自由」に支えられた個性豊かな大学教育が必要である。そして、この課題への取り組みは、昔も今もたいへん盛んである。ところが、昨今ニーズが高まりつつある教採対策のような画一的な学習指導は、しょせんは教師に「なる」ための方便にすぎず、本来の大学教育からは逸脱したものとみられている。

「試験対策的な授業ほど退屈だった」と学生時代の経験を語ってくれた参加者がいた。しかし、受験勉強というのは単調で、退屈で、しかも難しく、たいへんな根気と忍耐を要するものなのだ。受験勉強の経験から得られるのは、基礎的な知識・教養だけではない。苦難に（というより自分に）打ち勝った忍耐力と、それに裏打ちされた自信とが、合格者の財産となるのである。だから、受験指導といっても、「楽をして点が取れる方法」などを安易に教えるべきではない。通常の授業と同じように、じっくりと時間をかけ、継続的に、それこそ忍耐強く教えていくべきなのだ。

（7ページに続く）

教育人間科学部FD 報告資料

2004. 10. 13

同一名称授業の内容・方法の共通性・多様性と教員養成への責任

－「現代教職論」を事例にして－

榊原禎宏・高橋英児（学校教育講座）

1. 問題の設定

①戦後教育改革の一環として師範学校への批判がなされ、「大学における教員養成」が謳われて半世紀が過ぎたが、その内実は依然として明らかでない。今なお関係者の合意形成もままならず、むしろ採用や研修の側面から教員像が強く枠づけられる傾向がうかがえる（東京教師養成塾など）。

②その背景には、大学における「学問の自由」「教育の自由」と、国家資格である教職への職業準備教育との接合がうまくなされていない点があると考えられる。

③つまり、各授業を通じて実質上認定される教職資格の正当性を担保（説明責任）するため、教育活動はどのように行われるべきなのか、また各授業者の資質・力量はいかに求められ、そのためにいかなる研修機会が必要なのか否か。あるいは、そもそもこれら基準や標準という発想を「大学教育」としてどう考えるべきなのか、本学部の教育責任の点から答えることが重要と思われる。

④こうした問題意識も持ちつつ、高橋と榊原は同じ名称の教職専門科目「現代教職論」を担当していることを活かして、2003年度の各授業を例に授業者、学生、観察者の3つの立場から記述しようとした。同じ名称の授業として各々はどのような共通点と相違点で捉えられるのか、それは「大学における教員養成」としていかなる意義と限界があるのかを考えてみようとしたのである。つまり、各授業がどのような目標、内容、方法で行われ、それを学生はどのように受け止め、また第三者である観察者に両者はいかに映ったのかを描き出すことで、同一名称で提供されている授業としてこれらをどのように評価するか、協議、考察を進めた。

2. 授業の実際

①授業者の観点から－どういう授業が行われたか

（1）事例の対象：

◇「現代教職論」（前期一月曜日Ⅳ限、後期一火曜日Ⅲ限）

- ・榊原（前期）：履修者132名（うち約8割が1年生）、毎回110～120名参加。
- ・高橋（後期）：履修者83名（うち約8割が1年生）、毎回70名強が参加。

（２）授業者の構想

◇榊原：授業の力点とねらい

- １．「教えられる側」から「教える側」への主体の転換を促す、メタ認知のためのコミュニケーションを重視。
- ２．教師教育と教師像、関係法制、学校論と関わらせて俯瞰的に論じる。（ケースからではなく、一般論から個別論へ）
- ３．授業外時間に「教えられる学び」を進めるように課題を提示、授業と次の授業とのつながりを持たせる。
- ４．パワーポイント、ビデオ、プリントを活用し、変化に富んだ構成に努める（多様なメディアの一つとしての授業者）
- ５．学生による作問・解説を通じて「学び」を経験させる（学生による作問・解説）。
- ６．名札を用いるなど、相互作用的な関係を通じて、問いをたてて深める思考方法の試み

◇高橋：授業の力点とねらい

- １．教職観・子ども観を問い直す授業（「子ども・若者のリアリティ」から、教師と子どもを取り巻く現状理解へ）
- ２．具体的な授業実践を想定したテーマと内容（教師－教師間、教師－子ども間、子ども－子ども間といった関係において現れる対立や矛盾、当事者が抱える心的な葛藤といったコンフリクトに注目）
- ３．VTRや実践記録などの具体的な資料の活用
- ４．多様なコミュニケーションの場の保障（グループの編成、毎回ミニレポートの提出、「通信」の発行による意見交流）
- ５．ワークショップやアクティビティの導入（学生が主体的に「参加」できるグループ活動）

３．２つの授業の共通性と多様性

（１）共通性

- ・教育関係の理解の脱構築、教職に対する批判的な把握（教育目標）
→教職をめぐる学生の既存の理解・認識を揺さぶること
→彼らの教職志望を振り返らせること
- ・学生の主体的な「参加」を引き出す授業環境づくり
→学生による活動の導入
→「対話」（自己内、他者）の重視

（２）多様性

- ・授業内容の構成とアプローチの違い
→研究上の専門分野の違い（榊原－教育経営学・教育行政学、高橋－教育方法学・生活指導論）の反映、特に一般から具体（ケース）へ（榊原）と、具体（ケース）から一般へ、の違い（cf.）取り上げた主題、具体的資料、進め方

授業の構成

[榊原]

- 第１講（４/１４）オリエンテーション、いまの教員にできることは何か。
第２講（４/２１）オリエンテーション、いまの教員にできることは何か（２）
第３講（４/２８）テキスト第Ⅰ部総論１、教師になるということ、ミニ・ワーク①提示
第４講（５/１２）テキスト第Ⅰ部総論２、教師になる、ミニ・ワーク①解説
第５講（５/１９）テキスト第Ⅰ部総論２、教師になる（２）、ミニ・ワーク②提示
第６講（５/２６）テキスト第Ⅰ部総論３、だれがどのように教師を教育するのか、ミニ・ワーク②解説
第７講（６/２）揺れる教師像－「教える」ことと「学ぶ」こと（１）（VTR「中学教師６人の徹底討論」１９９８年）、ミニ・ワーク③提示
第８講（６/９）揺れる教師像－「教える」ことと「学ぶ」こと（２）、ミニ・ワーク③解説、学生による出題①

第9講（6/16）教師以外の「教職」を考える－教師論の見落としてきたこと－（VTR「こちら用務員室」2002年）、ミニ・ワーク④提示、学生による解説①

第10講（6/23）教師のやりがいとは－教師とは何者か（VTR「ツッパリたちと泣き虫先生」2000年）、ミニ・ワーク④の解説、学生による出題②

第11講（6/30）教師の資質・力量－ユーモアとは何か－（1）、レポート提出およびコメント交換、学生による解説②、学生による出題③

第12講（7/7）レポート返却、教師の資質・力量－ユーモアとは何か－（2）（VTR「自分を笑えば世界が変わる」1998年）、学生による解説③、学生による出題④

第13講（7/14）再レポート提出およびコメント交換、テキスト第Ⅲ部 課題と展望（VTR「教師誕生－新採教員の一年」1997年）、学生による解説④

第14講（7/28）再レポート返却、正誤問題の解答と確認、授業評価

[高橋]

第1講（10/7）オリエンテーション：教師による説明→ワークショップ（自己発見・他者発見ビンゴゲーム）→まとめ

第2講（10/14）子どもの自分くずしと自分づくり－子どもの成長と自立を考えよう：導入および問いかけ→ビデオ「家裁の人」→意見交換→まとめ

第3講（10/21）「やさしい」子どもたち・若者たち－子どもたち・若者文化から見える「こころのかたち」と「自分らしさ」：前時の感想の紹介と補足→導入→学生の活動と意見交換→問いかけ→ビデオ「ベル友－12文字の青春」（1996年）

第4講（10/28）「やさしい」子どもたち・若者たち（2）－みんなぼっちの世界－：前時の感想の紹介→ビデオの続き→意見交換（グループ）→まとめ

第5講（11/4）「やさしい」子どもたち・若者たち（3）－みんなぼっちの世界－：前時の感想の紹介→ビデオ「ネット社会と若者（NHK人間大学）」（2003年）→グループワーク→まとめ

第6講（11/11）子ども・若者と暴力－少年事件から何が見えるか－：前時の感想の紹介→グループワーク→まとめ

第7講（11/18）「いじめ」問題と子どもの発達（1）－ある教師の挑戦－：前時の感想の紹介と補足→ビデオ「3年B組金八先生①」→問いかけ

第8講（11/25）「いじめ」問題と子どもの発達（2）－ある教師の挑戦－：前時の感想の紹介→ビデオ「3年B組金八先生②」→まとめ

第9講（12/2）「学級崩壊」から見えるもの（1）－学校・教室の現在を見つめてみよう：前時の感想の紹介と補足→導入→ビデオ「学級崩壊～格闘する教師たち」（1997年）

第10講（12/9）「学級崩壊」から見えるもの（2）－学校・教室の現在を見つめてみよう：前時の感想の紹介→ビデオ「荒れる心にどう向き合うか 広がる学級崩壊」（1998年）→グループワーク→まとめ

第11講（1/13）「学級崩壊」から見えるもの（3）－「何でもあり」と「学級崩壊」／「ガムを噛むこと」から考えよう：ガムを噛むことをめぐる討論→まとめ

第12講（1/20）子どもから見た「家族」問題－「家族」って何だろう－：前回の講義の感想の紹介と補足→グループワーク→まとめ

第13講（1/27）「愛」があれば体罰だって...－学校の中の「隠れたカリキュラム」（ヒドゥンカリキュラム）：前回の講義の補足→体罰についての問題提起→グループワーク→まとめ

第14講（2/10）「よい教師」とは？－みんなで教師の「明日」を見つめよう：学生相互によるレポートの評価

補講（2/17）「希望としての教育」－「よい教師」とは－：レポートの講評→ビデオ「みんなで跳んだ」（2002年）→まとめ

4. 学生の受け止め

- ①授業評価と学生の自己評価は「鶏と卵」の関係にある。
- ②教職志望の変化は3割程度の学生に起こり、また授業評価と教職志望の変化については正の相関がうかがえる。
- ③ただし、教職志望の変化別に見た学生の受け止めには違いが認められず、いずれであれ変化を生じさせること自体に授業の意味があると考えられる。

5. 暫定的まとめと今後の課題

- ①2つの授業には共通性が認められる一方、授業者が情報交換とテーマ論議をする中で違いに気づき、それぞれの色合いを強めてもいった。つまり、事例のような交流は授業像を集約する方向だけでなく、多様化する方向にも作用する可能性がある。
→授業をめぐる論議や交流が、「最低基準」の確保という点だけでなく、高等教育として相対的な独自性のもとに授業を展開させる作用をも持ちうる。つまり、授業者間の協同は、授業を一元的に収束させるだけでなく、より多様な授業像を生み出す契機にもなる、と仮説できる。
→実際は千差万別な大学での授業の基本条件と教員養成教育のガイドラインのありようをどのように考えればよいのか。またそれは、「大学による教員養成」をいかに担保するのか。
- ②同一名称の授業に限らず、各授業が卒業要件単位 128+a の一部を担っているという理解と自覚のもとに進められるべきであり、資料の管理、施設・設備の改善など条件整備も合わせて、カリキュラムとしての教員養成をいっそう考えるべき。
→教育内容と方法の「まとめり」は高等教育であることと同時に、職業準備教育としてどの程度求められるのか。各大学・学部による事実上の教員資格認定を行う根拠をいかに示しうるか。
→これら共通性と多様性がありうることを踏まえ、よりよい授業を提供するための大学教員の職能を高める条件整備のありようを考えることが課題になる。
- ③その際、学生の教職志望をどのように捉えるかが問題になりうる。つまり、教職に就くことを前提に教員養成教育を行うとすれば、たとえば入試においてこの点を問うことも考えられる。ところが「教員養成における開放制」原則は、大学在学中の経験を通じて教職への志望
・
を変化させることも想定しており、「教師にでもなるか」という学生を認めている点で特徴的である。また、教職に就かずとも学校教育に理解がある地域住民になるのは有意義と考えられる。これらの点をめぐって、本学部が果たすべき教育責任はどのように具体化されるべきなのか、論点になるだろう。

6. 関連文献

- 高橋英児・榊原禎宏・大和真希子「教員養成の教育内容・方法の共通性・多様性と大学教員の職能開発（1）－『現代教職論』を事例にして－」『教育実践学研究』第9号、2004。
- 榊原禎宏『大学教育と「大学における教員養成」－授業者のふりかえりと学生による授業評価－』山梨大学教育学部研究室報告書、1998。
- 榊原禎宏「大学における授業実践と教職課程－学生による授業評価の分析から－」『日本教師教育学会年報』第4号、1995。
- 大和真希子・榊原禎宏「教職専門科目における学習先行型の授業の試み－『現代教職論』を事例として－」『教育実践学研究』第8号、2003。
- 日本教育大学協会『教員養成の「モデル・コア・カリキュラム」の検討－「教員養成コア科目群」を基軸にしたカリキュラムづくりの提案－』2004。

個性豊かで自由な大学教育は思考力を育て、画一的で強制的な受験教育は忍耐力を育てる。どちらも教師に不可欠の資質である。とりわけ、児童・生徒への接し方や学級運営が困難をきわめる昨今では、教師には、改善策を講じる思考力以前に、目の前の状況に耐えて自分を見失わない胆力が求められている。

教採突破の単なる方便としてではなく、教師に必要な忍耐力を養う訓練としての受験指導に積極的かつ組織的に取り組んでいくことが、「大学教育と教職教育との接合」を実現する一つの手段になり得るのではないかと思う。

FD 研修会の魅力

教育実践総合センター 鳥海 順子

F D 研修会のお知らせをいただく度に、今度こそと思いつつ、なかなか実現できませんでした。が、今回やっと参加することができました。回を重ねる毎に、研修会の内容も多様化し、興味をそそられます。今回は学校教育講座の榊原氏と高橋氏のそれぞれが担当されている同一科目「現代教職論」の授業に関する比較検討および、本学における今後の教員養成のあり方を問うものであり、私自身深く考えさせられました。両氏の授業内容、方法の違いも興味深いものでした。榊原氏の授業は教職や学校制度など大局的な見地から、高橋氏は子どもや学校の今日的課題から切り込んでいくもので、どちらも工夫され、それぞれの個性があふれる授業でした。今年度は、同時間に両氏の授業を設定し、「体罰」をテーマに、教員も、双方の学生たちもディスカッションする時間を持たれたとのことでした。聞いていたこちらもわくわくしてきましたから、学生たちにとってもさぞおもしろい授業であったことと思います。おふたりがこのような授業を実現されたこと自体が大変価値あることだと思いますし、学生のための授業づくりを目指す誠実な姿勢に感服しました。

今回の研修を通して、同一内容の科目や関連科目の教員がお互いの授業について語り合う必要性や、授業を受ける学生の立場に立って、教育実習も含めて4年間のカリキュラムが体系化できているのかをチェックすること、「大学で教員養成をすること」の意味を問い続けることの大切さを感じました。本日参加した学生から、「大学では教員採用を意識した授業より学生自らが考える授業を」という声も印象に残るものでした。初めて参加して、学生や様々な講座の教員が一同に介し、率直に、自由に意見交換できる場が持てるという、F D 研修会の魅力の一端に触れることができたように思います。今回ご発表下さったおふたり、そしてF D ワーキンググループの皆様は心より感謝致します。

アンケートの自由記述から

- ・今回は同一科目名の方々の報告で興味深かったです。例えば、関連科目内の複数教員による報告、教員養成カリキュラムの問題等も大きな問題ではありますが、考えてみたいところです。
(教員)



- ・開放性の問題とからめて、本学部が複合学部であることをどう考えるか。私を含め、いわゆる教科専門の教員は、教員養成とゼロ免の両方に関わっています。今日の議論は、学校教育プロパーの問題として考えるか、学部全体の問題として考えるかで、大分、方向が違ってくると思います。(教員)

- ・大学の先生方も授業内容の検討をされていることを、今日初めて知りました。よりよい授業の創造のためには大切なことだと思います。(内留生)
- ・前回に続き、今回も参加させて頂いたのですが、前回に比べて今回は、先生方の参加が少なく、残念に思いました。前回も会には参加しているが寝ている先生もいて、それもすごく残念でした。また、実際に授業に参加していて、この先生には、もう少し自分の授業について考えてもらいたいなという先生がいらしていなかったのも、残念でした。学生が授業に対しての姿勢を見直す必要があるとも思います。しかし、先生方にももっと授業について、学生について考えて欲しいと願います。(学生)

FDリレーエッセイ第1回

忘れていたことと見つけたもの

共生社会講座 寺戸 節郎

FD・WGからこのリレーエッセイの依頼をいただき、しばらく忘れていてふと思い出した言葉があります。それは、17年前私が本学に着任したころに耳にした「無免許運転」という言葉です。言うまでもなく、あくまで教育について無資格であるという意味ですが、私もいままで無免許で教育に携わってきました。

しかし、無免許であること以上に問題なのは、実は教員になるまでに私が教育実践について何も教育を受けてもいないことです。考えてみれば、このことはとても無謀で教育を受ける側にとっては迷惑、有害なことです。無免許のうえに、運転法を習ったこともない人間が運転しているのと同じですから。

もちろん、それなりに経験を積むことで自己流の運転法を身につけることはできます。ところが、悲しいかな、それまで経験したことのない問題に直面すると、自己流では解決には多大の時間を要することになり、場合によっては解決までたどり着くことができない場合があります。勘と経験に頼った成り行き管理ならぬ成り行き教育の限界と言えるでしょう。

私のような教師が限界を超えたいと思うように動機づけ、支援することもFDの大きな目的のなかには含まれるのかと思います。FDの考え方のひとつには、日頃の教育活動でしばしば出会う困難や悩みを解決するためのヒント集を編み、各教員が自分にとって便利だと思ったところをピックアップして授業の参考にしていけばいい、という私にはありがたい考え方もあるそうです。

すでに皆様ご存知のこととは思いますが、その具体的な成果の「ティーチング・ティップス」(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>)と呼ばれる電子テキストを見つけました。まだの方は、一度アクセスしてみられたらいかがでしょう。

最後になりましたが、本学部におけるFDが個人レベルでのFD実践を集約し、学部としての特徴を持ったFDへと構築されていく息の長い活動となることを期待いたしております。

次回のエッセイは、学校教育講座の寺崎先生にお願いいたします。

編集後記

本号より「FDリレーエッセイ」を連載します。執筆者が次号の執筆者を指名するという方法で、順番にFDに関するご意見や感想を語っていただきたいと思います。なお、今回ご紹介の「ティーチング・ティップス」は「成長するティップス先生」として玉川大学出版部より出版されています(ISBN4-472-30257-8)。(I)